

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：24403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23710302

研究課題名(和文) 東南アジアのタケ類をモデルとした人文景観の形成に関する研究

研究課題名(英文) The cultural landscape created by bamboos in Southeast Asia

研究代表者

大野 朋子(OHNO, Tomoko)

大阪府立大学・生命環境科学研究科(系)・助教

研究者番号：10420746

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：地域固有の植物景観を形成する要因の一つとして、人間とタケ類との関わりと植物としてのタケ類がどのように伝播し、拡散しているのかを東南アジアにおける少数民族にみられるタケ類の利用をモデルとして調査した。リス族、ラフ族、モン族、アカ族は10種程度のタケ類を利用に合わせて使っている。4つの民族は共通して竹製の笙を使うが、材料のタケの種類は、ラフ族、リス族、アカ族では共通して自生種を使い、モン族では自生ではない温帯性のタケ類を栽培し、使用する。モン族は、文化的背景のもと笙を葬儀に使う特別なものとして扱うためにその材料となるタケを伴って居住地を移動し、資源供給の確保のために栽培することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We investigated how bamboo spread from a relationship of a human being and bamboo, about bamboo used by ethnic minority in Southeast Asia. A Lisu, Lafu, Hmong and Aka tribe who live in the survey area use around 10 bamboo species to suit the purpose of use. These 4 tribes play a traditional pipe instrument made by bamboo in the same way, and the materials of the pipe instrument which a Lisu, Lafu and Aka tribe use are wild bamboos, on the one hand a Hmong tribe used the cultivated temperate bamboos. The Hmong treats this instrument as the special thing which uses on funeral. Therefore the bamboo, which is the material of the instrument, is very important, and when they emigrate, the bamboos carried with them always together.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：生物文化多様性 伝統楽器 少数民族 伝播 東南アジア 植物資源 民族文化 地域景観

1. 研究開始当初の背景

ある地域における人文景観は、自然環境と生計を営む人間の活動とに関わってその骨格が構築される。そのうちで植物の創る景観はもっとも基本的な要素であり、人間活動と自然とのバランスのとれた景観は、豊かな生物相を育むとともに美しい風景を創り出す。

東南アジアの人文景観を形成する植物のうち、タケ類はもっとも人間との関わりが強い植物で住環境や食文化と関連するだけでなく、祭祀や農耕の営みとも大きく関わっており、タケの利用やその加工技術は、東南アジアで極めて高い水準にあると言える。しかし、東南アジアで高い多様性を示すタケについては、分類学的検証がほとんど進められておらず、地域研究においても分類学的に種を特定した記述は極めて少ない。

中国南部やタイ、ラオスなどのゴールデントライアングルでは、多様な民族が歴史的移動を繰り返しながら固有の文化と農耕技術を抱えて自然資源を活用して暮らしているが、タケは其中で重要な植物資源であり(大野ら 2006, 2007)、日本にはない多様なタケ類が利用されている。タケ類の利用には、種によっても民族によっても固有の使い方があり、共通して使われている種も認められる(F. Anderson 1993, 大野ら 2008)。

例えば、タイの一民家で栽培される 10 種類のタケ類には地域原産や中国からの導入種があり、種によって使い分けられている(大野ら 未発表)。一方、原産地がマダガスカル島とされるダイサンチク *Bambusa vulgaris* は、アジアの広い地域に広汎に見られ、共通して寺院や水路に使われている(大野ら 2009)。これは、人間がトレガーとなり利用に応じてタケの種を選択し、特定地域に持ち込んで栽培していることを示唆している。集落の景観を創るタケには多様な背景があり、生活に関連して配置された竹林の他に、単に線状に配置された竹林でも農業用水路や斜面の崩壊防止などの造成目的の違いによっても種数と多様度に違いがあり、それを受けて竹林景観の基層がつくられている(Ohno et al., 2010)。

これまでの調査から、タケ類は必ずしも機能面だけで特定地域に導入されるものではなく、民族固有の文化や歴史的背景によって篩にかけられ、人とともに移動し、地域独自の景観は流動的に創り上げられていると考えている。この仮説を実証するために、タケ類の創り出す景観をモデルとして民族間の歴史や文化の違いとタケ類の利用、利用における導入経路を明らかにして、タケのような人と深い関わりのある資源植物には、民族文化にともなって地域間を移動あるいは定着しながら利用されてきた種が存在することを実証する必要がある。予備調査において、タイに住むモン族の 1 集落で、本来は自生していない散生型のタケ類が楽器の材料のために栽培されているのを確認し、民族におけ

るこのタケの必要性や導入経路を探ることで、文化を背景とした人間のふるまいが、地域固有の人文景観を創り出す一つの要因であることを実証する糸口になると考えた。

2. 研究の目的

地域の人文景観の構成要素である植物の多様性が、地域原産の植物、地域外から導入される有用植物、民族の移動に伴う植物から成立することを、東南アジアのタケ類を事例として民族植物学的フィールド調査を中心として実証することを目的とした。具体的には東南アジアの少数民族の集落において伝統楽器「笙」の材料として利用されるタケ類と住居周辺に維持されて多様な目的に使われているタケ類を対象にして、タケの分類学的種を確認しつつ、タケの民族利用の実相を明らかにし、タケの果たす人文景観への役割と地域の景観の成立を考察する。

3. 研究の方法

多様な少数民族が暮らすタイ北部(チェンマイ・チェンライ・ナン・パヤオ・プレー・メーホンソン県)およびラオス北部(ルアンナムター郡、ウドムサイ県、ボーケーオ県)中国雲南省を調査対象地として、少数民族の暮らしの中で使用され、景観や文化に関わる植物資源であるタケ類について民族植物学的フィールド調査を行った。タイ北部には主にカレン族、ラフ族、モン族、アカ族、リス族、ヤオ族が暮らしており、その一部は中国やラオスでも生活している。どの民族もタケを資源とし、民族に固有のタケ利用がみられる。特に予備調査によって、地域外から導入されたと思われるタケ類を利用するモン族を主体としながら、伝統楽器「笙」の材料となるタケの導入経路、呼び名、タケの種とその利用方法について聞き取り調査を行った。調査を行った集落は、モン族 36 集落、リス族 7 集落、ラフ族 14 集落、アカ族 4 集落である。タケ類の同定に不可欠な形態的特徴を捉えるために、調査時期は、雨季と乾季両方でおこなった。重要なタケ類については証拠標本作製し、必要に応じて分子同定も行って、精度よく種を同定した。また、モン族以外に竹製の伝統楽器を所有する民族の集落でも同様に調査し比較・検証した。

4. 研究成果

調査対象とした 6 民族、カレン族、ラフ族、モン族、アカ族、リス族、ヤオ族のうち、文献調査ならびに現地調査によって、カレン族、ヤオ族の所有する主な楽器は青銅のドラや太鼓、動物の角などであり、竹製の伝統楽器「笙」を使用するのはラフ族、モン族、アカ族、リス族の 4 民族であることがわかった。この結果をもとに 4 民族(ラフ族、モン族、アカ族、リス族)の利用するタケ類について詳しく調査、比較した。

(1) 各民族におけるタケ類の利用

表1 ラフ族、モン族、アカ族、リス族の集落で主に利用されるタケ類

種名	タイ語
<i>Dendrocalamus strictus</i> (Roxb.) Nees cf.	mai sang
<i>Bambusa tulda</i> Roxb.	mai bong
<i>Gigantochloa albociliata</i> (Munro) Kurz	mai lai
<i>Thyrsostachys siamensis</i> Gamble	mai ruak
<i>Cephalostachyum virgatum</i> Kurz	mai hia
<i>Cephalostachyum pergracile</i> Munro	mai kao lam
<i>Dendrocalamus hamiltonii</i> Nees & Arn. ex Munro	mai hok
<i>Dendrocalamus giganteus</i> Munro	mai wan
<i>Dendrocalamus asper</i> Backer ex K.Heyne	pai tong
<i>Sinobambusa intermedia</i>	不明

4つの民族で利用頻度の高いタケ類は、10種類確認でき、(表1) そのうち9種は叢生型で1種は散生型のタケであった。

タイ語で Mai sang と呼ばれる *Dendrocalamus strictus* cf. や、Mai Bong と呼ばれる *Bambusa tulda* は、最も一般的に使用されている種で、材として家の床や壁、屋根の梁、紐などに使うことができ、タケノコも食べる幅広い用途に使用できるタケであった。また、Mai lai と呼ばれる *Gigantochloa albociliata* は材としてはあまり使用されず主に農業用の豆の支柱などに使われるが、タケノコが美味として好まれ、食用とされており、Mai kao lam と呼ばれる *Cephalostachyum pergracile* はカオ・ラムというタケ筒にもち米、ササゲ、ココナッツミルクなどを入れ、火にかけて蒸し焼きにした食べ物を作る際に使用する。その他、*Thyrsostachys siamensis* や *Dendrocalamus giganteus* も農業資材や建築資材として使用されており、これらのタケ類は4つの民族で共通性の高い利用がされていた。一方で、同じ種であるにも関わらず、民族間で特有の利用をする種が存在し、*Cephalostachyum virgatum* や *Dendrocalamus hamiltonii*、*Sinobambusa intermedia* は楽器の材料として使われていたことが分かった。

(2) 「笙」の材料としてのタケとその利用

4つの民族で「笙」は伝統楽器として共通して使用されていた(写真1)。しかし、その形状および材料、使用方法など民族間で異なる点が見られた。

それぞれの民族で、笙の呼び名は異なるが基本的な材料はタケであった。形状についてみるとアカ族、ラフ族、リス族は同じかあるいは非常によく似ており、音色や吹き方も共

通している。それに対してモン族の笙(ケーン)は大きさも非常に大きく、他の民族の笙とは明らかに異なっていた。それぞれの材料を詳細に調べてみると、アカ族、ラフ族、リス族の笙はパイプ部分に *C. virgatum* を使用しており、このタケは非常に稈の厚みが薄く、軽いのが特徴である。基部はヒョウタンを用い、タケとヒョウタンの接着部はハチのプロポリスを使用していた。リードは基本的にはタケ(種不明)で、全てが自然素材である。モン族のケーンは、4本のパイプ部に *S. intermedia*、1本の太いパイプは *D. hamiltonii* を使用していた。*D. hamiltonii* については、タイでは普通に見られる種だが、*S. intermedia* は、自生地が中国貴州省周辺とも言われており、温帯域に生育する散生型のタケ類で、本来、タイには自生していない。基部は主にチーク材を用い、リードは黄銅で作られている。

次にこれらのタケ類の導入方法について着目してみた。アカ族、ラフ族、リス族の笙のタケは、集落近くの山に自生するものを山採りされている。対して、モン族は、*D. hamiltonii* については同様に山採りするものの、*S. intermedia* は、モン族の調査集落36か所中、このタケの栽培は24か所あり(不明3か所、栽培無し9か所)、7割近くの集落で栽培されており、さらに居住地を移動しながら生活する習慣を持つモン族は、移動の際にこのタケを伴い、新たな生活の場で栽培していることが明らかになった。アカ族、ラフ族、リス族の笙のタケとモン族の笙のタケとの導入方法の違いは、「笙」に対する意識の違いが関係するものと思われ、笙の利用について調査を行った。

笙の利用についてどのような時に笙を演奏するのかを聞き取り調査した結果、リス族では7か所中6か所の集落で結婚式および正月などの祭りに使用し、葬式には使用しないことが分かった。同様にラフ族では14か所中12か所で結婚式および祭りに使用し、葬式の際にも使用するのは4か所しかなく、アカ族においても結婚式および祭りに使用し、葬式には使用しない集落は4か所中3か所で



モン族: ケーン

アカ族: ラ・ジェ



ラフ族: ノ・ク・マ

リス族: フウ・ルウ

図1 民族ごとの笙の形状と呼び名

あった。このことから、アカ族、ラフ族、リス族は笙を結婚式や祭事などハレの日に用いており、楽器として普段から気軽に演奏されていることが明らかになった。一方、モン族は、正月には笙を使用するものの、結婚式での使用はあまりされていなかった。しかし、聞き取りを行った 36 か所すべての集落で、葬式の際には必ずこの笙を使用するということが明らかとなった。モン族にとっての笙は、死者の魂をあの世に送る重要な役割を担うもので、普段、楽器として使用されることはない。つまり、この笙から奏でられる音は、単なる音楽ではなく、霊的な力を持った特別なものであり、その材料となるタケもまた、代替えのない特別なタケとして扱われていることが分かった。

葬儀という民族のアイデンティティを最も強く表す行為に対して必要不可欠な笙であるからこそ、その材料となる *S. intermedia* は、特別重要に扱われており、資源の供給を確実なものにするためにモン族は、民族の移動にこのタケを伴い、移住先で栽培を行う。

民族独自の文化的な背景によって、タケは、本来の自生地を離れて導入栽培されていることが本研究より明らかとなり、このことは、地域固有の植物景観は、人間の文化的なふるまいによって形成されるという一つの証明となった。この成果は、生物文化多様性についての議論を深め、持続的な環境の保全や、創造における学術的情報を提供するものと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- ① 大野朋子、山口裕文、タイ北部の少数民族のもつ「六角星」、形の文化研究、査読有、7 巻、2012、1-6

〔学会発表〕(計 4 件)

- ① 大野朋子、タイの少数民族における祭祀植物としてのタケ類とくに笙について、照葉樹林文化研究会、2013、東京
- ② 大野朋子、山口裕文、東南アジアにおける少数民族の伝統的竹利用とタケ類の人為的分布、第 44 回種生物学、2012、滋賀
- ③ 大野朋子、タケ造りの魔除け「鬼の目」にみられる形の多様性-タイ・ラオスの少数民族調査から-、照葉樹林文化研究会、2011、大阪
- ④ 大野朋子、タイ・モン族の笙のタケについて、照葉樹林文化研究会、2011、東京

〔図書〕(計 1 件)

- ① 阿部純、石居天平、歌野礼、上田善弘、大澤良、大野朋子、加賀秋人、黒田洋輔、瀬尾明弘、竹井恵美子、谷口研至、中田政司、中山裕次郎、本城正憲、三村真紀子、村松幹夫、安田健太郎、山口聰、山口裕文、山根京子、管開雲、魯元学、北

海道大学出版会、栽培植物の自然史Ⅱ〔東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化〕(山口博文編)、2013、371(95-118)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 朋子 (OHNO Tomoko)
大阪府立大学・大学院生命環境科学研究科・助教
研究者番号：10420746

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：